

国内で約半世紀ぶりに確認されたモウコムカシヨモギ

～珍外来種が浜厚真の海岸を埋め尽くす～

ポイント

- ・モウコムカシヨモギ（キク科）は、国内では室蘭市で一度だけ分布記録のある推定外来種。
- ・本種の生育を、約半世紀ぶりに厚真町と石狩市の海岸付近で確認。
- ・厚真町では海岸を埋め尽くすように繁茂。今後、分布が拡大する可能性があり、注意が必要。

概要

北海道大学総合博物館の首藤光太郎助教、同ボランティアの道川富美子氏、同大学院地球環境科学研究院の露崎史朗教授、北海道野生植物研究所の五十嵐博氏らの研究グループは、北海道厚真町と石狩市で、国内で約半世紀ぶりにモウコムカシヨモギの生育を確認し、生育環境から外来種と推定されること、今後の分布拡大に注意が必要であることを報告しました。

モウコムカシヨモギは、国内では約 50 年前に一度だけ室蘭市で採集記録のある植物です。当時から外来種であることが推定されていましたが、本種の国内分布を指摘した海外の文献もあり、分布の実態が曖昧でした。2022～2023 年に、露崎教授と道川氏は、厚真町と石狩市で、それぞれ見慣れない植物を発見しました。首藤助教がこの植物を検討し、本種と同定しました。

生育地はすべて海岸に近い人為的影響の大きい環境であり、本種はやはり外来種であるものと思われます。発見した産地の一つである厚真町の海岸では、膨大な個体数を持つ本種が、地面を埋め尽くすように繁茂していました。塩性湿地をはじめとした希少種が集中する湿地を主な生育環境とすることから、湿地生態系への影響が懸念されます。**今後分布が拡大する可能性があり注意を要するため、本種を見かけた場合、速やかに以下お問い合わせ先までご相談ください。**

なお、本研究成果は、2025 年 3 月 7 日（金）発行の Acta Phytotaxonomica et Geobotanica の 76 巻 1 号（日本植物分類学会が刊行する学術誌）に掲載されました。



厚真町で発見されたモウコムカシヨモギ

【背景】

モウコムカシヨモギ *Symphyotrichum ciliatum* (Ledeb.) G.L.Nesom は、世界中の湿地や荒れ地に分布するキク科の一年草です。総苞片^{*1}が細いこと、舌状花卉^{*2}を持たないこと、一年草であることなどが特徴です。国内では、1974年に北海道室蘭市で一度だけ採集された記録が存在します。このときの採集環境が都市部の人為的攪乱の大きい場所であったことから、当時から外来種であることが推定されていました。一方で、海外では本種が日本国内に分布することを記述した文献もあり、国内における分布状況が不明瞭な状態が続いていました。なお、和名「モウコムカシヨモギ」は、戦前に中国東北部（旧満洲国）で採集された標本に基づいて提案されました。

北海道大学大学院地球環境科学研究院の露崎教授は、2022年の秋に北海道厚真町で、見慣れないキク科植物を発見しました。この植物について同総合博物館の首藤助教に相談しましたが、当時証拠標本がなかったことから十分な検討ができず、同定に至ることができませんでした。このとき首藤助教は道内の外来種に詳しい北海道野生植物研究所の五十嵐氏にも相談しましたが、五十嵐氏も未確認の植物であり、しばらく正体が分からない状況が続きました。

1年後、次は総合博物館ボランティアの道川氏が、北海道石狩市で種名の分からないキク科植物を発見し、首藤助教に相談しました。この植物は、露崎教授が発見した植物と非常によく似ていました。1年前とは異なり今度は標本が手に入ったので、スムーズに同定することができそうでした。このタイミングで、発見した植物がモウコムカシヨモギであることが初めて疑われました。少なくとも道内で一般的に見られる植物ではなさそうだったので、この植物を同定し、生育状況を明らかにすることを目的に研究を進めました。

【研究手法】

これまでに発見された厚真町の2集団、石狩市の1集団で証拠標本を採集し、生育状況（生育環境、個体数、同所的に生育する植物種など）を記録しました。証拠標本の形態を、モウコムカシヨモギやその近縁種の標本や文献上の記載と比較しました。比較の際には、本種のタイプ標本^{*3}の画像、1974年に室蘭市で採集された本種の標本、戦前に中国東北部で採集された標本なども確認しました。

【研究成果】

発見した植物は、舌状花卉を持たず、総苞片が線形で、一年草であることが推定される貧弱な根を持っていました（図1）。これらの特徴は、文献上のモウコムカシヨモギの記載や、本種のタイプ標本や室蘭市と中国東北部で採集された標本の形態的特徴とよく一致していました。以上から、厚真町と石狩市で発見されたキク科の植物は、モウコムカシヨモギと同定されました。今回の発見は、日本国内では約50年ぶり、2回目のモウコムカシヨモギの採集記録となりました。

今回発見した3集団は、海岸付近の砂浜上の道路のわきなど、いずれも人為的攪乱の影響が強い環境に生育していました。これらの生育状況から、約50年前と同様に、今回発見された集団も外来種であることが推定されました。また、厚真町の1集団では、膨大な個体数が広範囲にわたりかなり高い密度で生育しており（図2）、生態系への影響が懸念されました。海外の文献によると、本種は荒れ地のほか、塩性湿地^{*4}などの様々な湿地にも生育するとされています。湿地は、我が国では希少種が集中し高い生物多様性を持つ環境の一つであり、本種の今後の動向には特に注意する必要があります。

【今後の展望・社会への影響】

希少種の集中や生物多様性が顕著な湿地に侵入するポテンシャルがあること、集団によっては地面を埋め尽くすほど繁茂することから、本種は今後国内において分布が拡大する可能性があり、特に注意が必要です。実際に、論文の受理後、五十嵐氏により小樽市の海岸で新たな集団がすでに発見されました。専門家だけでは、本種の急速な分布の拡大を追跡できない可能性があります。**本種によく似た植物を発見された際は、速やかに以下お問い合わせ先までご連絡ください。**なお、現在の北海道で普遍的に見られる種の中で、最も本種に類似しているのはヒメムカシヨモギ *Erigeron canadensis* L. だと思います。本種は、ヒメムカシヨモギと比べて背丈が低いこと（おおよそ高さ 40cm 以下）、頭花*⁵がより大きいこと（長さ・幅ともに 1cm 程度）、舌状花弁がないことにより区別が可能です。

論文情報

論文名	Re-collection of Potentially Introduced <i>Symphyotrichum ciliatum</i> (Ledeb.) G.L.Nesom (Astereae, Asteraceae) in Japan after Half a Century（半世紀ぶりに日本で再採集された潜在的外来種モウコムカシヨモギ [キク科シオン連]）
著者名	首藤光太郎 ¹ 、道川富美子 ¹ 、五十嵐博 ² 、露崎史朗（ ¹ 北海道大学総合博物館、 ² 北海道野生植物研究所、 ³ 北海道大学大学院地球環境科学研究院）
雑誌名	Acta Phytotaxonomica et Geobotanica（植物分類学の専門誌）
D O I	10.18942/apg.202421
公表日	2025 年 3 月 7 日（金）（オンライン公開）

お問い合わせ先

北海道大学総合博物館 助教 首藤光太郎（しゅとうこうたろう）

T E L 011-706-4508 F A X 011-706-4029 メール shutoh@museum.hokudai.ac.jp

U R L <https://www.museum.hokudai.ac.jp/>

配信元

北海道大学社会共創部広報課（〒060-0808 札幌市北区北 8 条西 5 丁目）

T E L 011-706-2610 F A X 011-706-2092 メール jp-press@general.hokudai.ac.jp

【参考図】



図 1. モウコムカシヨモギの若い頭花の様子（石狩市、撮影：道川富美子）



図 2. 厚真町の海岸で繁茂する様子、白い点はすべてモウコムカシヨモギの頭花

【用語解説】

- *1 総苞片 … キク科などの花序に見られる一器官。セイヨウタンポポの「花」にある反り返った部分。
- *2 舌状花弁 … 花弁が合着して舌状になった花弁のこと。マーガレットの「花」にある白い部分。
- *3 タイプ標本 … 新種や新亜種などの新分類群が発表される際に基準として引用される標本のこと。
- *4 塩性湿地 … 海岸部に見られる、汽水や海水によって塩分を含んだ湿地。全国的に減少傾向にある。
塩性湿地に生育している植物としては、アッケシソウが有名。
- *5 頭花 … いわゆるキク科の「花」を指す用語で、多数の花が集まって形成された花序(花の集合体)。